

【第38回大会個別発表抄録】

パンデミックにおけるユーモア ーコロナ禍でのソリューションの探索ー

二本松 直人¹⁾・小岩 広平²⁾・奥野 雅子³⁾

¹⁾福島県立医科大学 ²⁾東北大学大学院 ³⁾岩手大学

問題と目的: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染は、世界規模で広がり続けている (World Health Organization, 2021)。コロナ禍での大学生は、大学の講義がオンラインとなり、自粛生活、経済活動、部活など、あらゆる面での制限を体験した (文部科学省, 2020; 藤井, 2021)。その結果、大学生の多くが不安やうつ症状、ストレス症状をそれぞれ抱えていることが報告された (Wang et al., 2021)。このように、COVID-19 の拡大に伴う大学生のメンタルヘルスの問題が指摘されているが、従来の研究では、これらに肯定的な影響を与える要因の検討が不足していることが問題としてあった。そこで、本研究では、パンデミック下の大学生の主観的幸福感に肯定的な影響を与える可能性のある要因として、①大学生がもつユーモアの傾向、②大学生のもつ対人恐怖傾向の二つに焦点をあて、これらが主観的幸福感に与える影響について検討を行うことを目的とした。

方法: 全国の大学生を対象に、インターネット調査を実施した。大学生 145 名 (男性 62 名, 女性 83 名, $M=21.29$, $SD=1.45$) が調査対象者となった。回答者には、性別、年齢、コロナ禍での生活の変化 (藤井, 2021 をもとに作成)、対人恐怖特性 (堀井・小川, 1996)、ユーモアスタイル (吉田, 2012)、コロナ禍でのユーモアのエピソード、主観的幸福感 (伊藤ら, 2003) を尋ねた。

結果と考察: まず、コロナ禍での大学生の生活の変化を最尤法プロマックス回転による因子分析によって分類した結果、コロナ禍での生活の変化は、「隔離と孤立」「家族関係の悪化」「生活水準の低迷」の 3 つに分類された。また、クラスタ分析により回答者を分類した結果、比較的大きな変化を経験していない群 (C11)、「隔離と孤立」のみを変化した群 (C12)、全面的な変化をした群 (C13) の 3 群に分類された。

さらに、主観的幸福感を目的変数、ユーモアスタイルおよび対人恐怖特性を説明変数とした、ステップワイズ法による重回帰分析を群ごとに行った。その結果、C11 では対人恐怖が ($\beta=-.71$, $p<.01$)、C12 では対人恐怖 ($\beta=-.46$, $p<.01$)、自己高揚的ユーモア ($\beta=.53$, $p<.01$)、攻撃的ユーモア ($\beta=-.29$, $p<.01$) が、C13 では自己高揚的ユーモア ($\beta=.40$, $p<.01$) と親和的ユーモア ($\beta=.35$, $p<.01$)、それぞれ有意な関連を示していた。全面的な影響を受けた C13 において自己高揚的ユーモアと主観的幸福感と関連したことは、コロナ禍で自己高揚的ユーモアが絶望感を軽減させるという先行研究 (Olah & Ford, 2021) と一致していた。以上の結果により、隔離、家族関係、経済的困窮まで幅広く影響を受けている人々において、自己高揚、あるいは親和的なユーモアの使用が有効である可能性が示された。